

エッセイ

ガラスの街とやま

富山市ガラス美術館 館長

渋谷 良治 氏



見出す事を可能にするということを強く実感した。そうした環境を富山で作り、学生を育てることが富山の学校の大きな特徴にしたいと考えた。

そこで日本人の作家に加え、ガラスの長い伝統と優れた教育システムを持つチェコと、ガラスアートとしてのガラス制作の先端に行くアメリカの作家を指導陣に加えた。

チェコとアメリカからの常勤講師以外に、ワークショップやアーティスト・イン・レジデンスで年に3度、世界の著名なアーティスト累計100名以上が富山で学生達に熱心に教えてくれた。開校以来30年、卒業生も530名余り、富山では100名余りの作家が工房を構え創作活動をしている。

そして、30年余りに渡る「ガラスの街とやま」の事業の一環として、2015年8月に富山市ガラス美術館は開館し、私は館長としてガラス芸術の振興に力を注いでいる。

世界的に有名な建築家 隈研吾氏が設計を手掛けた「TOYAMAキマリ」の中にガラス美術館は、1950年以降の現代ガラスを中心に様々な美術表現を紹介し、中心市街地にある事から街の活性化も担っている。昨年5周年を迎え、常設展とこれまでに24本の企画展を開催し、100万人以上が観覧に訪れ、図書館を含める「TOYAMAキマリ」には、

私は2年のオランダでのガラス留学の経験から、異なる環境のバックグラウンドを持つ人々が集う場が、新たな自分を

380万人もの方々が訪れている。(令和2年12月末現在)

2018年から開催の国際公募展「富山ガラス大賞展2018」は世界のガラスアートの最新の成果を集め、その発展に貢献した。ドイツの「ノイエス・グラス」等、国内外のガラス専門誌にも成果が掲載された。また、第2回目の「富山ガラス大賞展2021」では、51の国と地域から前回を上回る1126名の応募があり、国際的な審査が行われる予定だ。今後「富山ガラス大賞展」は、トリエンナーレ方式で3年ごとに開催し、世界の最新の成果を集め、その大賞と金賞の作品をガラス美術館にコレクションする。ガラス美術館は、多くのデータを蓄積することで、将来、世界的な現代ガラスアートを発信する美術館となることを目指している。

また、2019年には京都で行われた国際博物館会議に来日した海外のガラスの美術館関係者や、アメリカにある世界最大級のガラス美術館であるコーニングガラス美術館の方々が富山市を訪れ、研究所、工房、ガラス美術館を視察、「これ程ガラスの総合的な取り組みをしている地域はない」と富山の成果に驚かれた。こうした海外の美術館の訪問により現在連携の話も進めている。

今年、1991年にスタートした富山ガラス造形研究所も30周年を迎えようとしており、美術館で記念展が行われる予

定だ。富山の葉瓶製造の歴史から始まった富山のガラスは、「ガラスの街とやま」の事業として、「人材の育成」「ガラスの産業化の推進」「文化芸術の振興」として、学校、工房、美術館として発展し、着実に歩みを進めている。

文化は長い年月をかけ、熟成される。富山市のガラスの取り組みは、まず「人材を育成する」という独自の方針から出発し、そこから生まれた多くのつながりの中で、新たな文化を育み、多くの優秀な人材を輩出している。この「人材の育成」が、将来、文化の定着と地場産業の育成に結びつき、この地が「ガラスの街とやま」と呼ばれる日を目指して、次世代に引き継がれ、時代を重ねる中で、世界に認められるような「ガラスの街」に発展する事を大いに期待する。

プロフィール

渋谷 良治 (しげや りょうじ)

富山市ガラス美術館 館長

- 1956年 埼玉県生まれ
- 1981年 多摩美術大学彫刻科卒業
- 1984年 東京ガラス工芸研究所 研究科卒業
- 1989年 Gerrit Rietveld Academy (ヘリットリートフェルトアカデミー) ガラス科卒業 (オランダ)
- 1990年 富山ガラス造形研究所 設置準備事務局
- 1991年 富山ガラス造形研究所 主任教授
- 2015年 富山市ガラス美術館館長に就任